

研究ノート

道の駅を拠点とした地域活性化

—地域と物語の関係性—

清水 聡子

Marketing on Regional Revitalization based on Michi-no-Eki (Roadside Stations)

SHIMIZU Satoko

要 旨

「道の駅」は「道路に駅があってもいいのではないか」という提案がその始まりである。1993年「道の駅」創設以来、2017年4月21日までに全国1,117駅が登録されている。本稿では道の駅を拠点とした地域活性化について地域と物語の関係性に着目し、地域の独自性や魅力を生み出す源泉として物語を捉えて考察する。

キーワード

道の駅 地域活性化 物語 ふるさと（故郷） 独自性

目 次

- I. はじめに
- II. 文化的景観と物語
- III. ふるさとの原風景とは
- IV. 事例研究
- V. むすびにかえて

注

文献

I. はじめに

筆者は「地域活性化のマーケティング」¹⁾を「地域活性化のために、地域を経営するというマインド」²⁾を持ち、自ら主体的に考え、行動し、地域を経営することであると定義した。本稿では道の駅を拠点とした地域活性化について考察する。

考察のきっかけは、2015年、松本大学と道の駅「中条(なかじょう)」及び長野国道事務所が長野県初の連携企画型実習を開始したからである。連携企画の実施にあたり、本学と道の駅「中条」の運営を担う指定管理者であるアクティオ株式会社は道の駅「中条」を拠点とした地域づくりと地域活性化を図ることにより、地域発展と学生教育に寄与することを目的として事業連携・推進に関する協定を締結した。

この協定は道路利用者へのサービスが中心であった「道の駅」を地域の拠点として活用し、さらに大学と連携することによって、若者との交流をすすめる新たな価値の創出を期待するという、国土交通省の「道の駅を利用した地域活性化」事業の一環である³⁾。

長野市西部の山間部、主要地方道長野大町線沿道に立地する道の駅「中条」は1995(平成7)年4月に登録された。道の駅「中条」のある旧中条村は、2010(平成22)年1月に長野市、信州新町、中条村の1市1町1村で合併し、長野市中条となった。

旧中条村は山姥伝説の里として知られている。小松和彦は『憑霊信仰論』⁴⁾及び『妖怪学新考-妖怪からみる日本人の心』⁵⁾の中で、人間に祭祀されているか、それとも祭祀されていないか、といった指標を設定することで、超越的存在つまり霊的存在を、「神」と「妖怪」に、研究の必要上区別し、この区別は固定的なものではなく、超越的存在の人間との関係のあり方によって性格を変化させること、人間、動物、植物、人工物、さまざまな事象など、つまり極端ない方をすれば、名づけられているもののすべてに霊的な存在を認める傾向

のあるアニミズム的信仰をもつ日本では、名づけられたものはすべて、「神」になる可能性と「妖怪」になる可能性を合わせもっていること、などを指摘した。

旧中条村の山姥伝説では山姥を「妖怪」ではなく、「神」として祭祀している^{注1)}。中条村教育委員会編集・発行の『中条村の神さま仏さま』では旧中条村で山姥がどのように祀られているかが詳細に説明されている。なかでも山姥が「子育ての神様」として住民から大変慕われていることに着目し、山姥伝説を中条地域の大切なお宝として捉え、「子育ての神：山姥(やまんば)伝説の里」中条を応援します!として、松本大学の学生は「88(やまんば)プロジェクト」を立ち上げ、活動を始めた。さらに道の駅「中条」を拠点とした中条地域の活性化に向けて中条地域のお宝を探し、長野市中条地域最大「むしくらまつり」では学生は自ら考案した企画を実現している。また道の駅と大学連携成果発表交流会にも参加し、企画内容と成果についてプレゼンテーションを行った。

本稿では道の駅を拠点とした地域活性化を、神話や民話と地域の関係性に着目し、地域の独自性や魅力を生み出す源泉として物語を捉えて考察する。

福田敏彦は『物語マーケティング』⁶⁾において、「物語そのものを売るタイプ、物語を背後に持つタイプ、何かを売るために物語を利用するタイプなどいろいろあるが、とにかく、現在パワーのあるマーケティングは、物語性と関連しているものが多い。単なるモノではなく、モノガタリがマーケティングで重要性を増しているのである」と述べる。

楠木建は『ストーリーとしての競争戦略』⁷⁾の中で、「優れた戦略とは思わず人に話したくなるような面白いストーリーだ」と述べ、競争戦略を「ストーリーづくり(story-telling)」として理解する視点と、その背後にある論理、「ストーリーという視点に立てば、競争戦略についてこれまでと違った景色が見えてくる」と説明する。

企業はマーケティング戦略や競争戦略の中で物語 (story) を重視することで、自社の独自性や魅力を生み出そうとしている。ここで主語の企業を地域に置き換えてみよう。地域は物語 (story) を重視することで、地域の独自性や魅力を生み出そうとしている。置き換えが可能である。時代を越えて語り継がれてきた神話や民話、歌には、大きな力がある。地域の独自性や魅力を生み出す源泉として神話や民話や歌を物語として捉え、地域の景色を眺めていこう。

II. 文化的景観と物語

ジェイムズ・リーバンクス (James Rebanks) は著書『羊飼いの暮らし』の中で、「その地に根づいた物語とアイデンティティの大切さを理解し、「文化的景観」の本当の意味を知ることができた⁸⁾と述べている。

「文化的景観」⁹⁾は、英語でcultural landscape、フランス語ではpaysage culturel、世界遺産委員会が1992年に導入した自然遺産との境界領域に位置する文化遺産の新しい概念を総称する用語の日本語訳である。「文化的景観」の概念は世界遺産条約 (世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約 (Convention Concerning the Protection of the World Cultural and National Heritage)) において、「自然と人間の共同作品」に相当し、文化遺産として定義された。文化的景観は更に3つのカテゴリーに分けて詳しく定義されている。人により意図的に意匠され創造された景観 (landscape designed and created intentionally by man)、有機的に進化してきた景観 (organically evolved landscape)、人と自然の強いきずなを表す文化的景観 (associative cultural landscape) の3つである。

「文化的景観」の価値は、人びとが土地をかたちづくる行為に見出されるのみならず、神話や信仰、物語、そして、往々にして豊かさに関係する所産にも

見出しうると『世界遺産のための文化的景観 保全・管理のためのハンドブック』¹⁰⁾に記載されている。また「物語や神話は、直接見ることができる内容を越えた意味を景観に与え、そのことから人びとの「心の地図」、つまり場に対する意識を育む」との記述がある。

筆者は「人口減少に向き合う地域」¹¹⁾の中で、「大地のエネルギーを五感 (視・聴・嗅・味・触)、場合によっては第六感 (五感のほかにあるとされる感覚で、鋭く物事の本質をつかむ心のはたらき¹²⁾) で吸収するしゅみを作り上げることは、地域の魅力をデザインすることにつながる。地域を見つめ、本物の魅力を発見し、地域の力へと結びつけていくことが大切」と述べた。直接見ることができる内容を越えた意味を景観に与える物語や神話は第六感を刺激し、人びとの想像 (創造) 力をかきたてる。

豊かな暮らしとは何か、幸せな生活とは何かという問いに対する1つの答えが、一人ひとりが地域の中で自分の物語を紡ぎ、楽しみながら暮らすことではないだろうか。

III. ふるさとの原風景とは

2011年3月11日東日本大震災後、「ふるさと」の意味が問われている。「衣・食・住」のすべてが奪われ、「医療」も「職場」も破壊された地域がある。生きることの難しさに直面し、何ができるか、何をすべきかを自問すると同時に、多くのエネルギーを消費し、沢山の「モノ」を所有する暮らし方や今までの価値観に疑問が投げかけられている。

日本人の心のふるさとの情景、ふるさとの原風景の1つとして考えられるものに、100年以上歌い継がれている「ふるさと (故郷)」 (高野辰之作詞、岡野貞一作曲) がある。

1. 兎追いし かの山、小鮒釣りし かの川、夢は今もめぐりて、忘れがたき故郷
2. 如何にいます父母、恙なしや友がき、雨に風につけても、思い出ずる故郷

3. 志をはたして、いつの日にか帰らん、山は青き故郷、水は清き故郷

「ふるさと（故郷）」より

東日本大震災から6年が経過したが、「忘れがたき」「思い出ずる」「山は青き」「水は清き」故郷を喪失した人びとにとって、「ふるさと（故郷）」の歌詞はどのように響き、曲は流れるのだろうか。

「ふるさと（故郷）」を作詞した高野辰之は、1876（明治9）年、長野県下水内郡永田村（中野市豊田）に生まれた。日本の各地に伝わる昔話、民話の発掘とその再話作品の発表、日本の伝統的音楽文化の振興、日本の歌謡、演劇、文学の研究、日本の古典籍、墨蹟の蒐集と研究など、国文学者として日本文化の再発見につとめた¹³⁾。

「ふるさと（故郷）」を作曲した岡野貞一は、1878（明治11）年、鳥取県邑美郡古市村（鳥取市古市）に生まれた。岡野貞一を研究する鈴木恵一は「名曲が生まれた秘密」¹⁴⁾として、「高野、岡野二人のコンビで作られた名曲「ふるさと」「おぼろ月夜」「春の小川」「春が来た」「もみじ」の五曲は長野と鳥取の美しい自然と素朴な人情を歌い挙げたもので日本人の心にいつまでも残るものでしょう」と述べている。

高野辰之のふるさとである長野県と岡野貞一のふるさとである鳥取県から、日本人のふるさとの原風景に思いを馳せ、地域の姿を考察することは、ふるさとを喪失した人びとを抱える現在の日本において意味があると思われる。

豊かな自然環境の中で、時間的・空間的なゆとりが生活の楽しさを生み、日々の暮らしにおける「コト」体験の積み重ねが「充実」した暮らしに、そして幸せな生活につながるのではないだろうか。山に囲まれた長野県と海に恵まれた鳥取県には豊かな自然が身近にある。高野と岡野が生み出した日本人の心の原風景「ふるさと（故郷）」に思いを馳せ、地域の景色を眺めていこう。

IV. 事例研究

樋口忠彦は『日本の景観』¹⁵⁾の中で、人々の心の中には、どの人にも共通して好ましいと思われている風景が、ひっそりと息づいているようであるとして、これらの好ましき・心地よさの理由を問うていくことにより、これらの心地よい風景の本質的な所を見失うことなく、現実眼前の変化していく風景を、私達の生活に親密に織り込んでいくための方策をさぐっていく必要があることを述べた。そして盆地は日本人が心に抱く「ふるさと」の基本型、「風景」の原型、さらには日本文化の母胎となっていると記述する。また日本の景観を「盆地の景観」「谷の景観」「山の辺の景観」「平野の景観」に分類している。以下、樋口の盆地についての考えを引用しよう。

盆地は、いうまでもなく周囲を山に囲まれた閉鎖性の強い空間である。その景観は、一つの明確なまとまりをもっていて、一つの完結した世界としてイメージすることができる。そして、盆地の景観は、なぜとは知れず人の心を平穏にさせてくれるような、休息感に満ちた雰囲気をもっている。安息の地がまた人々にとって棲息の地として求められることには、何の不思議もない。渡り鳥はある一定の型の景観をもった場所にねぐらを定めるようであるが、日本人もまたしばしば、周囲を山に囲まれた盆地の景観に心ひかれてきたように思われる。

長野県歌「信濃の国」（浅井冽作詞、北村季春作曲）では、「松本伊那佐久善光寺 四つの平は肥沃の地」と歌われているが、四つの平は盆地である。長野県は高野と岡野が生み出した日本人の心の原風景としての「ふるさと（故郷）」でもあり、樋口が言うところの日本文化の母胎となっている「ふるさと（故郷）」でもある。

2017年3月27日、筆者は長野県松本市から鳥取県鳥取市へ向かった。松本駅から名古屋駅を経由し、京都駅へ。京都駅から鳥取駅まで「スーパーはくと」に乗車した。「スーパーはくと（白兔）」の乗

降の音楽は「ふるさと（故郷）」であった。駅に停車すると「兎追いし かの山」と曲は流れ、高野の生まれた長野県から岡野の生まれた鳥取県へ白うさぎに導かれているようであった。以下、鳥取市内の2つの道の駅を取り上げ、道の駅を拠点とした地域活性化を考察する。

1. 道の駅「神話の里 白うさぎ」^{注2}

道の駅「神話の里 白うさぎ」は2005（平成17）年に鳥取県鳥取市により設置され、国道9号に接続している。2014（平成26）年度国土交通大臣選定重点「道の駅」^{注3}である。古事記に記される因幡の白兎の神話から道の駅の名前がつけられている。キャッチコピーは神話のロマンを誘う道の駅「神話の里 白うさぎ」であり、目の前には白兎海岸が広がり、白兎神社が隣接している。鳥取砂丘は車で20分の距離にある。駅舎上の展望広場からは日本海が一望でき、立ち寄り地ではなく目的地となる道の駅である。

国土交通省中国地方整備局が2015（平成27）年3月25日に公表した「中国地方の「道の駅」の利用状況が分かった！」^{注4}、及び国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所が2014（平成26）年3月25日に公表した「鳥取県の「道の駅」の利用状況が分かった！」^{注5}によると、年間利用者約65万人。神話「因幡の白兎」、山陰海岸ジオパークの地形・地質遺産、古代山陰道の遺跡など、地域の歴史や自然の継承を担う「道の駅」である。周遊観光及び滞在観光の連携拠点となり、広域的な地域振興、産業振興を促進する。利用者分析による特長として、出発地は鳥取県が21%、他県が79%と他県利用が多い。鳥取空港（愛称名：鳥取砂丘コナン空港）近傍の道の駅であるため、遠方からの利用者の割合が多く、旅行形態は66%が宿泊である。地方創生の拠点となる「道の駅」の類型別機能は、地域外から活力を呼ぶゲートウェイ型である。

2. 道の駅「清流茶屋かわはら」^{注6}

道の駅「清流茶屋かわはら」は2006（平成18）年に鳥取県鳥取市により設置され、山陽・京阪神への主要な街道、国道53号に接続している。また鳥取自動車道に直結する。河原町は古くから上方往来の「上の茶屋」のまちとして賑わい、道の駅「清流かわはら」は現代版「街道の茶屋」として「人とモノ・情報が行き交う交流の場」「鳥取の文化情報発信の場」として親しまれている。

また清流「千代川」の流れる河原町は鮎の里としても有名な土地で、古くは古事記に登場する八上姫と大国主命の恋の舞台となった場所である。キャッチコピーは鳥取県のお土産が全部揃っている！鳥取県東部最初の窓口「道の駅 清流茶屋 かわはら」である。

国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所が2014（平成26）年3月25日に公表した「鳥取県の「道の駅」の利用状況が分かった！」^{注5}によると、中四国地域の道の駅利用者満足度ランキングで2年連続中四国地域1位。鳥取自動車道の開通の影響もあり、2013（平成25）年は年間約149万人の利用があった。農産物直売所「夢菜館」は、利用者増加に伴い、2013（平成25）の売上高は開業時2006（平成18）年の約1.5倍となった。道の駅では76名（2015（平成27）年2月）の雇用があり、地域の雇用促進に貢献している。

利用者分析による特長として、出発地は鳥取県が43%、他県が57%と他県利用が多い。出発地からの移動時間が3時間以内の利用者が半数以上であり、また目的地までの移動時間が2時間以内の利用者が約5割と多い。地方創生の拠点となる「道の駅」の類型別機能は、鳥取自動車道直結のため、観光総合窓口の役割も一部併せ持った地域センター型であると考えられる。

3. 小括

「道の駅」は1990（平成2）年1月に中国地域づくり交流会のシンポジウムの中で山口県の坂本多田^{かずあき}船方総合農場代表が「鉄道に駅があるように道路に駅があってもいいのではないか」¹⁶⁾との提案がなされたことがその始まりである。その後、1991（平成3）年10月から1992（平成4）年4月にかけて、山口県、岐阜県、栃木県の3地域において仮設の休憩施設を利用して「道の駅」の実験が地元市町村の主体性に基づいて実施された。1992（平成4）年3月30日、「美しく豊かな地域づくり～道の駅からのアプローチ」と題したシンポジウムが開催され、同年5月、7月、12月に「道の駅」懇談会が開催された。1993（平成5）年1月18日、「道の駅」に関する提言（越正毅「道の駅」懇談会会長）が道路局長に提出され、建設省ではこの提言を踏まえ同年2月

23日に「道の駅」登録・案内制度を定めた。同年4月22日、第1回「道の駅」登録証が103箇所¹⁷⁾に交付された。

「道の駅」は1993（平成5）年の制度創設以来、2017（平成29）年4月21日までに全国1,117駅が登録されている。図1に全国「道の駅」登録数（2017年4月時点）を示す。北海道の「道の駅」は119駅と全国最多であり、第2位は岐阜県で56駅、長野県は44駅で全国第3位の「道の駅」登録数である。

「道の駅」は安全で快適に道路を利用するための道路交通環境の提供、地域のにぎわいを目的とした施設で、「地域とともに作る個性豊かなにぎわいの場」を基本コンセプトとしている。「道の駅」には、休憩機能（Refresh）、情報発信機能（Information）、地域連携機能（Community）の3つの機能がある¹⁸⁾。図2に「道の駅」の目的と機能を示す。

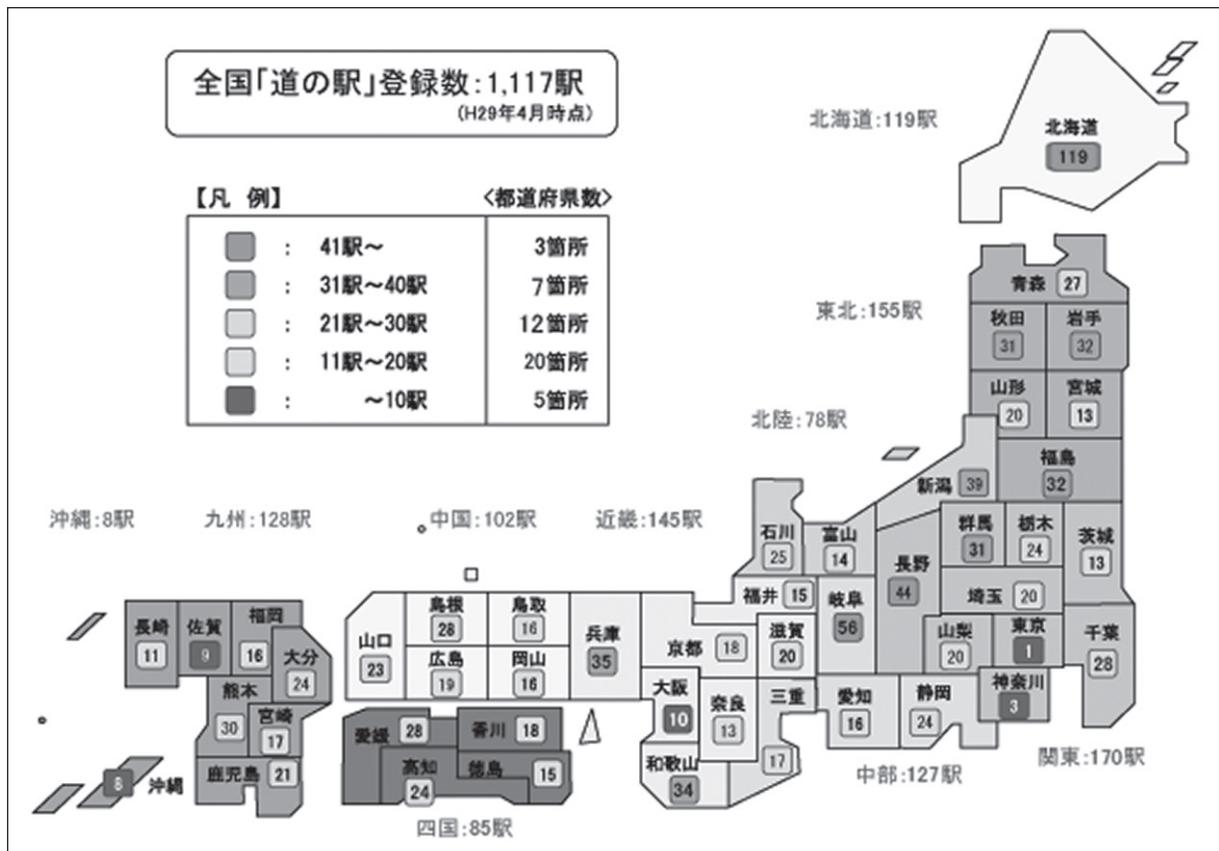


図1 全国「道の駅」登録数（2017年4月時点）

出所：国土交通省 HP：「道の駅」一覧
<http://www.mlit.go.jp/road/Michi-no-Eki/list.html>（閲覧日 2017.5.1）。

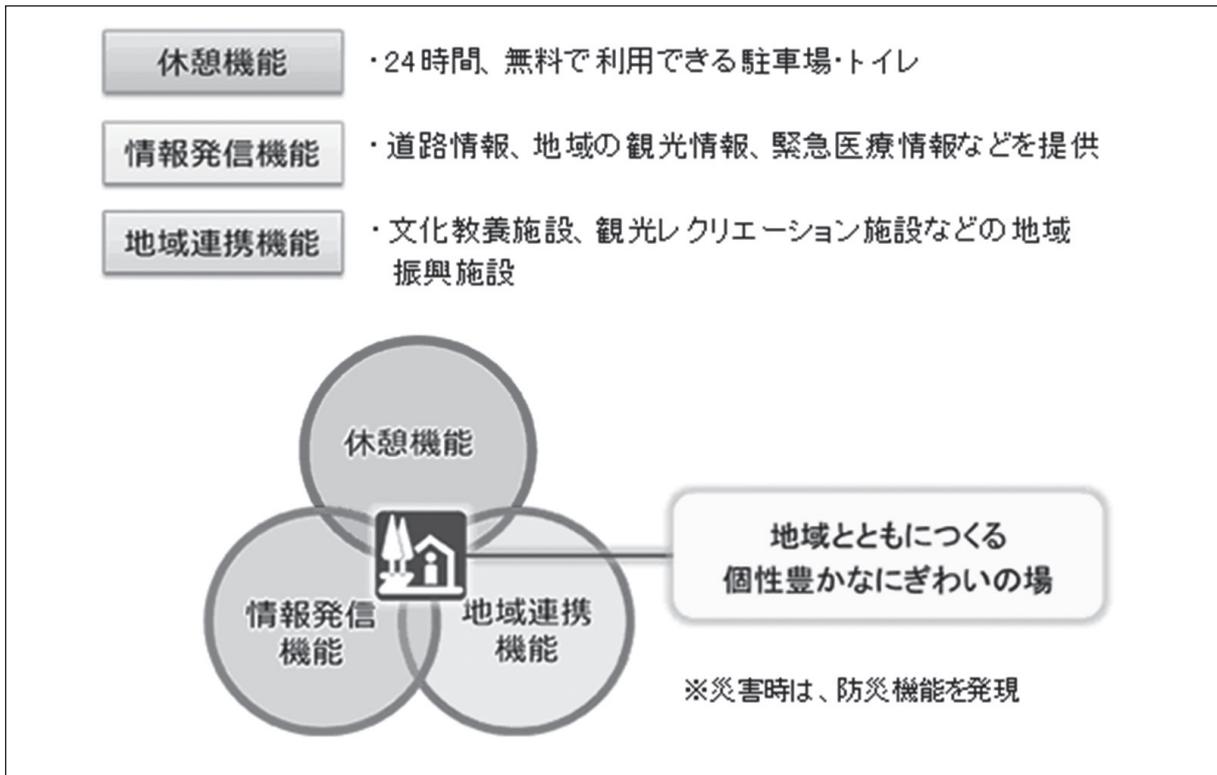


図2 「道の駅」の目的と機能

出所：国土交通省 HP：「道の駅」概要
<http://www.mlit.go.jp/road/Michi-no-Eki/outline.html>（閲覧日 2017.5.1）.

表1 地方創生の拠点となる「道の駅」の類型別機能イメージ

地方創生の拠点となる「道の駅」の類型別機能イメージ		別紙1
地域外から活力を呼ぶゲートウェイ型		地域の元気を創る地域センター型
インバウンド観光	<ul style="list-style-type: none"> ・多言語に対応した案内など、外国人観光案内所認定の取得 ・地酒やお菓子など、地域の特産品を免税で購入できる免税店の併設 ・外国発行クレジットカードの利用可能ATMの設置 ・無料公衆無線LAN環境の提供 ・電気自動車による周遊観光を可能とするEV充電設備の設置 等 	産業振興
観光総合窓口	<ul style="list-style-type: none"> ・観光協会等と連携した地域全体の観光案内機能 ・宿泊予約やツアー手配のための旅行業の登録 ・単なる物見遊山にとどまらない、史実・文化など知的好奇心を刺激する機会の提供 ・地域資源を活かした体験・交流機会の提供 等 	地域福祉
地方移住等促進	<ul style="list-style-type: none"> ・空き家情報や就労情報など、地方移住に必要な情報のワンストップ提供 ・若者に地域の魅力を体験する機会の提供 ・運営スタッフの公募等による雇用機会の創出 ・ふるさと納税に関する情報提供 等 	防災
		<ul style="list-style-type: none"> ・地域の特産品によるオリジナル商品開発、ブランド化 ・直接的な雇用に加え、地元生産者からの調達による雇用の創出 ・地元農林水産物を活用した6次産業化のための加工施設や、直売所の設置 等
		<ul style="list-style-type: none"> ・診療所、役場機能など、住民サービスのワンストップ提供 ・高齢者への宅配サービス ・健康、バリアフリーに配慮した高齢者向け住宅の併設 ・地域公共交通ネットワークの乗継拠点 ・SS(サービスステーション)過疎地における石油製品の供給拠点機能 等
		<ul style="list-style-type: none"> ・自衛隊、警察、消防等の広域支援部隊が参集する後方支援拠点機能 ・地場産品の取扱や燃料保有、非常電源装置等によるバックアップ機能 ・平時からの防災啓発教育のため、既往災害等の情報発信 等

出所：国土交通省 HP：「道の駅」による地方創生拠点の形成
<https://www.mlit.go.jp/common/001052851.pdf>（閲覧日 2016.12.12）.

「道の駅」は登録数が1,000駅を超え、「道の駅」自体が目的地となり、まちの特産物や観光資源を活かしてひとを呼び、地域にしごとを生み出す核へと独自の進化を遂げ始めている。国土交通省は2014（平成26）年8月28日に、「道の駅」による地方創生拠点の形成～モデル箇所の選定と総合的な支援～を公表した。地方創生の拠点となる先駆的な「道の駅」の取組をモデル箇所として選定し、関係機関が連携の上、計画段階から総合的に支援する。表1に地方創生の拠点となる「道の駅」の類型別機能イメージを示した。地域外から活力を呼ぶゲートウェイ型と地域の元気を創る地域センター型に分類した。ゲートウェイ型はインバウンド観光、観光総合窓口、地方移住等促進の3つに類型化され、地域センター型は産業振興、地域福祉、防災の3つに類型化されている¹⁹⁾。

2011年3月11日東日本大震災後、「衣・食・住」のすべてが奪われ、「医療」も「職場」も破壊された地域がある。生活の場を喪失し、「ふるさと」を喪失した人びとを支える大きな機能を果たしたのが地域の「道の駅」であった。関満博、松永桂子らは『震災復興と地域産業3』²⁰⁾の中で、「被災地の前線に立つ道の駅」、「後方支援に従事した道の駅」、そして津波で流されながらも再開を果たした「被災から復旧・復興した道の駅」の3つに類型化し、それぞれの道の駅が果たした役割、今後の課題について論じている。応急的な避難所・支援機関として目覚ましい機能を発揮した「道の駅」は、被災後、復興の拠点として、人びとの希望であり続けている。安全に暮らし続ける上で、地域における「道の駅」が果たすべき役割が非常に大きくなっていると同時に、「道の駅」の可能性が広がっていると考えられる。

2015（平成27）年4月、公益財団法人日本マーケティング協会が優れたマーケティング活動を表彰する「第7回 日本マーケティング大賞」²¹⁾において、『「道の駅」による地方創生マーケティング』（全国「道の駅」連絡会）は大賞を受賞した。

今や地域の活性化に欠かせない社会インフラとなった「道の駅」は、観光客の集客や雇用機会の創造などの「地方創生」でも大きな期待が寄せられている。旅行者、地域住民、農産物生産者、地方自治体、道路管理者のすべてのステークホルダーがwin-winとなるビジネスモデルは斬新で、まさに日本発のユニークなマーケティング事例となっている。また災害時の防災拠点や地域の観光総合窓口としての活用など、新しい取り組みも始まっている。

一般道路の休憩施設としてはじまった「道の駅」は、1993年の登録開始時は103の施設でスタートした。以後20年以上にわたり拡大を続け、「道の駅」そのものが観光目的となるほどの集客力を発揮している施設が多数存在している。そして、生産と購買の関係モデルは地域の活力と雇用を誘発する、いまや地域活性化の切り札として位置付ける地方自治体も存在する。特に、取り扱う商品やサービス、関係者とのネットワークの組み方など、国や中央組織が指示して管理するのではなく、「休憩」「情報提供」「地域連携」の3つの基本機能を共通フレームとして、あとはそれぞれの地域の自主的な管理に委ねるマネジメント手法は、新しいマーケティング・モデルの可能性を示唆するものであるという声があがった。

スタンプラリーの開催や共通ポイントカード、地域に共通した食材による新商品の開発など道の駅の相互連携も活発となってきている。国と自治体、第3セクター、民間企業、生産者が連携し、運営して成功しているマーケティング・モデルは地域の活性化に寄与するとともに、広く国民に支持されることがマーケティング大賞の受賞理由として説明された。

V. むすびにかえて

本稿では「道の駅を拠点とした地域活性化-地域と物語の関係性-」として、道の駅を拠点とした地域活性化について、神話や民話と地域の関係性

に着目し、地域の独自性や魅力を生み出す源泉として地域の物語を捉えて考察した。

道の駅「中条」のある旧中条村（長野市中条）は山姥伝説の里として知られている。松本大学総合経営学部の学生は88（やまんば）プロジェクトを立ち上げ、「子育ての神：山姥（やまんば）伝説の里」中条を応援します!として、地域の独自性や魅力を生み出す源泉として山姥伝説を地域の物語として捉え、活動を行っている。

事例研究で取り上げた道の駅「神話の里 白うさぎ」は重点「道の駅」であり、古事記に記される因幡の白兔の神話から道の駅の名前がつけられている。また道の駅「清流茶屋かわはら」は古事記八上姫の里の駅である。神話が駅名となった日本で唯一の道の駅「神話の里 白うさぎ」と、道の駅「清流茶屋かわはら」は八上姫と大国主命の恋の舞台となった場所である。白兔海岸、白兔神社、八上姫が祀られている売沼神社、八上姫公園等とともに、2つの道の駅は連携して白兔神話エリアを形成し、地域固有の神話から地域の独自性や魅力を生み出そうとしている。地域の歴史や自然を題材として、白兔神話を基にした施設を作り、タイアップ商品、特産品の開発・販売を実施している。

また道の駅「神話の里 白うさぎ」は地形・地質遺産や古代山陰道出土品の展示施設、神話学習コーナーを整備し、体験・周遊観光のためコミュニティバスが運行している。道の駅に観光協会職員を配置し、地域ボランティアガイドと連携した“おもてなし”を実践している。鳥取自動車道、山陰道の整備が進む中、くつろぎをテーマに滞在可能な休憩施設を整備している。マリンスポーツやジオパークウォーキングの拠点化による体験・滞在観光のためのスタッフ配置や長時間の滞在や休憩が可能な緑陰広場を整えている。地域の歴史や自然の継承を担う「道の駅」である。

長野県は日本人の心のふるさとの情景、ふるさとの原風景の1つとして考えられ、100年以上歌い継がれている「ふるさと（故郷）」の作詞者高野辰之

の生誕地であり、鳥取県は作曲者岡野貞一の生誕地である。山に囲まれた長野県と海に恵まれた鳥取県には豊かな自然が身近にある。高野と岡野が生み出した日本人の心の原風景「ふるさと（故郷）」に思いを馳せ、長野県と鳥取県の道の駅を拠点とした地域活性化を考察した。

2016年4月4日に新宿南口地区基盤整備事業として「新宿南口交通ターミナル」（愛称名：バスタ新宿）が開業した。また2017年4月20日に市街地再開発事業により「GINZA SIX」が開業した。両施設は交通の結節点としての機能を兼ね備えた大規模集客施設であり、屋上緑化が行われている。バスタ新宿では壁面緑化も行われている。環境への配慮とともに、緑（自然）に潤いや癒しが求められている。

「草木が生み出す色は、なんて不思議なんでしょう」。染織家の志村ふくみ人間国宝が感動したのは、自然を象徴する「緑」が植物の染料から出ないと知った時。緑は、黄と青を掛け合わせて初めて定着する。自然界では、そのままにしておくすぐに失われてしまう色なのだ²²⁾という。

緑豊かな自然環境の中で、時間的・空間的なゆとりが生活の楽しさを生み、日々の暮らしにおける「コト」体験の積み重ねが「充実」した暮らしに、そして幸せな生活につながるのではないだろうか。

豊かな暮らしとは何か、幸せな生活とは何かという問いに対する1つの答えが、一人ひとりが地域の中で自分の物語を紡ぎ、楽しみながら暮らすことだろう。「道の駅」の進化と深化によって、豊かな自然を有する地域において、「衣・食・住」と「医療」「職業」の「充実」という可能性が広がっている。豊かな自然は豊かな暮らしに直結するのではないだろうか。

レイチェル・カーソン（Rachel L. Carson）は、「もしもわたしが、すべての子どもの成長を見守る善良な妖精に話しかける力をもっているとしたら、世界中の子どもに、生涯消えることのない「センス・オブ・ワンダー（THE SENSE OF WONDER）＝

神秘さや不思議さに目を見はる感性」²³⁾を受けてほしいとたのむでしょう。」という。また「人間を超えた存在を認識し、おそれ、驚嘆する感性をはぐくみ強めていくこと」の意義について、次のように述べる。

地球の美しさと神秘を感じとれる人は、科学者であろうとなかろうと、人生に飽きて疲れたり、孤独にさいなまれることはけっしてないでしょう。たとえ生活のなかで苦しみや心配ごとにてであったとしても、かならずや、内面的な満足感と、生きていることへの新たなよるこびへ通ずる小道を見つけだすことができると信じます。地球の美しさについて深く思いをめぐらせる人は、生命の終わりの瞬間まで、生き生きとした精神力をたもちつづけることができるでしょう。(省略)自然がくりかえすリフレイン―夜の次に朝がきて、冬が去れば春になるという確かさ―のなかには、かぎりなくわたしたちをいやしてくれるなにかがあるのです。

長野市中条地域には、山姥伝説と虫倉山(信州百名山)や栃倉の棚田(日本の棚田100選)等、豊かな自然と物語がある。直接見ることができる内容を越えた意味を景観に与える物語は第六感を刺激し、人びとの想像(創造)力をかきたてる。

想像(創造)力をかきたてられた学生は緑に囲まれた道の駅「中条」という素晴らしい実践教育の場で、経営学を総合的に学び、「未知への探求」を楽しんでいる。問題や課題を見つけ、課題解決型実習(Project-Based Learning)に取り組み、試行錯誤を繰り返す。学生は自分が行動することによって自分も社会も変化することを体感し、地域活性化の核である地域自慢の種を発見しはじめた。また中条地域最大のおまつり「むしくらまつり」では道の駅「中条」の皆様、地域の皆様と連携・協力し、学生は自ら考案した企画を実施した。道の駅「中条」をフィールドとした理論と実践の融合から地域発展と学生教育の充実を目指している。

地域に対する誇りや帰属意識を醸成するおまつりは地域のアイデンティティ(存在証明)であると

考えられる。地域住民や来訪者も含めた多種多様な人びとが集まる長野市中条地域最大の「むしくらまつり」の意義は、人と人とのつながりを形成する可能性があることだ。道の駅を現代版の「楽市・楽座」と考え、新しい何かを生み出し、新しいことに挑戦できるイノベーションの実践の場となることが望まれる。

日本のふるさとの原風景を守るためにも、耕作放棄農地、間伐放棄山林、空家への対応が求められている。88プロジェクトでは耕作放棄農地に地域特産物である西山大豆の種をまき、収穫し、西山大豆を使った商品アイデアを提案し、商品を開発しはじめている。こうした6次産業化の実践は、道の駅「中条」を拠点とした地域活性化の1つの方向性であり、ふるさとの原風景の荒廃を救う方法であると考えられる。

道の駅「中条」を拠点として、虫倉山や栃倉の棚田、大姥神社、蟲倉神社、太田の水車など山姥伝説エリアを形成し、未知を楽しむ場を生み出すことができればと考えている。地域の独自性や魅力を掘り起こし、新たな仕事を生み出すことで、「ここにきてよかった」と思う人を増やすことができれば面白いであろう。さらに長野県と鳥取県の道の駅で「ふるさと原風景協定」を遠隔地で締結すれば、山と海の連携となるため、新たな仕事とライフスタイルを提唱することができるかもしれない。遠隔地協定は、防災面でも重要な役割を果たすと思われる。

謝辞

本稿は、2016(平成28)年度松本大学研究助成(萌芽研究)による研究成果の一部をまとめたものであり、ここに感謝の意を表します。

注

^{注1} 中条村教育委員会編集・発行、『中条村の神さま仏さま』（2009）では、旧中条村で山姥がどのように祀られているかが詳細に説明されている。

大姥神社 小虫倉は虫倉七社の一社。梅木の太姥様として崇敬され、旧梅木村の住民を氏子とする。社は三社あり、本宮は小虫倉山頂に鎮座。里宮は乗出合集落の上松山地籍に鎮座し、奥宮は虫倉山の裏側鬼無里の元穴に鎮座。元穴は、虫倉山の北側の絶壁下にある岩穴で、大昔大姥様が住んでいたという伝説が残る。現在この穴の中には、梅木大姥神社奥社と鬼無里上平の虫倉神社が並んで鎮座している。

虫倉神社 地京原は草創の時期は不詳であるが、古くより地京原郷の産土神（うぶすなかみ）として尊崇され、寿命延長の守護神とされている。社殿の裏から虫倉山登山道を数百メートル程登ったところに奥社がある。祭神は大山祇命（おおやまつみのみこと）、磐長姫命（いわながひめのみこと）、火産命（ほむすびのみこと）を祀る。子供の癩の虫を切る虫切り鎌が神紋とされ、子供の健やかな成長を願い、古くより子供の守り神として崇敬を集めている。

夫婦岩 蟲倉神社 伊折は、元禄10年（1697）の松代藩「堂宮改帳」には、「伊折村 蟲倉大明神 甚兵衛」と記録がある。蟲倉七社の総社であり、古くから伊折村の産土神として崇敬される。蟲倉神社には二社があり、大山祇命を祭神とする蟲倉大明神と、外林にあり磐長姫命を祭神とする大姥大権現である。記紀神話では大山祇命は山の神とも云われ大地を司る神とされ、磐長姫命は大山祇命の娘神で長命（ちょうめい）や子育ての神とされている。この神社のお守りや御札には小さな鎌が表されている。子供の癩の虫を切る「虫切り鎌」として信仰され、子供の健やかな成長が祈願される。大姥大権現は「おうばさま」と呼ばれ、地域の民間信仰として敬愛親しまれている。おうばさまは子供を大変可愛がり、子供達が川や池で溺れるなど危険な目にあつたときには、子供の頭に刈り残してある「ととつ毛」をつかんで助けてくれたという。「ととつ毛」は子供が成長して小学校に入る歳になると切り取って蟲倉神社に納め、無事な成長を感謝するのが習しであった。またおうばさまは子供を見守る神であるばかりでなく、農業の神様でもあつたと伝わる。昔から蟲倉神社は時の有力者の崇敬も篤かった。戦国時代には、柏鉢城（かしわばちじょう）を築いた伊藤六左衛門や次の城主市川梅印等の武将が神社護持にあつたという。また松代藩主真田公の尊崇も篤く、江戸後期に幕府の老中となつた第八代幸貫（ゆきつら）は、定紋の幕と幟（のぼり）さらには鳥居を寄進し、令夫人からは神簾、姫君からは千羽鶴などが献納されている。1852（嘉永5）年10月には朝廷より、明治天皇の御生誕にあつて権中納言藤原実愛（さねなる）の和歌が奉納されている。

この献歌を受けた宮下摂津神官は、直ちに祈願祭を11月27日に執行し、氏子も全員参列して皇子のご健勝を祈願した。1924（大正13）年、崇敬者より魚屋北溪（ととやほっけい）筆の「おうばさま」と「金太郎」の一对の浮世絵が奉納されている。

一番大姥神社 青木 虫倉大明神を祀る虫倉七社の一の宮である。1935（昭和10）年代頃までは、子供のととつ毛を大姥様に納め、子供の健やかな成長を記念したという。現在は八十八夜祭りに神楽を奉納している。

^{注2} 道の駅「神話の里 白うさぎ」（鳥取市白兔613）松田美昱 駅長へのヒアリング（2017.3.28）と入手資料及び道の駅「神話の里 白うさぎ」HP <http://www.sirousagi.com/index.html>（閲覧日2017.3.9）、道路整備促進期成同盟会全国協議会監修『道の駅旅案内全国地図平成28年度版』ゼンリン（2016）をもとに作成した。

^{注3} 「重点「道の駅」の選定について～地方創生の核となる「道の駅」を重点的に応援します～」として、国土交通省道路局が2015年1月30日、公表した。全国モデル「道の駅」選定数は全6箇所、重点「道の駅」選定数は全35箇所、重点「道の駅」候補選定数は全49箇所である。
https://www.mlit.go.jp/road/Michi-no-Eki/juten_eki/model02.html（閲覧日2017.3.30）。また2015（平成27）年度重点「道の駅」選定数全38箇所を国土交通省道路局が2016年1月27日、公表した。https://www.mlit.go.jp/road/Michi-no-Eki/juten_eki/model02_h27.html（閲覧日2017.3.30）。

^{注4} NTTドコモが提供する「ドコモ地図ナビ」サービスの「地図アプリ」「ご当地ガイド」において、オートGPS機能を利用されている方より、利用許諾を得たうえで送信される位置情報をNTTドコモからの委託によりゼンリンデータコム社は個人が特定されないよう集計・処理したうえで提供するデータにより国土交通省中国地方整備局が公表。<https://www.cgr.mlit.go.jp/kisha/2015mar/150325top2.pdf>（閲覧日2017.3.30）。

^{注5} 同上データより国土交通省鳥中国地方整備局鳥取河川国道事務所が公表。<https://www.cgr.mlit.go.jp/tottori/news/2014/150325press1.pdf>（閲覧日2017.3.30）。

^{注6} 道の駅「清流茶屋かわはら」（鳥取市河原町高福837）への現地視察（2017.3.28）と道の駅「清流茶屋かわはら」HP <http://yakamihime.com>（閲覧日2017.3.30）、道路整備促進期成同盟会全国協議会監修『道の駅旅案内全国地図平成28年度版』ゼンリン（2016）より作成した。

文献

¹⁾ 清水聡子、「地域活性化のマーケティング-子ども・学校・地域の視点から野沢温泉ジュニアスキークラブを考える-」『松本大学地域総合研究』第15号、pp.61-71（2014）。

- 2) 古川一郎編,『地域活性化のマーケティング』有斐閣, pp.i-vii (2011).
- 3) 清水聡子,「長野県初松本大学×道の駅「中条」×国土交通省連携企画松本大学総合経営学部による道の駅「中条」を拠点とした地域活性化-88プロジェクト-」『松本大学地域総合研究』第17号, pp.163-171 (2016).
- 4) 小松和彦,「山姥をめぐる-新しい妖怪論に向けて-」『憑霊信仰論』講談社学術文庫, pp.278-313 (1994).
- 5) 小松和彦,「妖怪とはなにか」『妖怪学新考 妖怪からみる日本人の心』講談社学術文庫, pp.36-64 (2015).
- 6) 福田敏彦,『物語マーケティング』竹内書店新社, pp.3-4 (1990).
- 7) 楠木建,『ストーリーとしての競争戦略』東洋経済新報社, pp.i-xiii (2010).
- 8) リーバックス J. (濱野大道訳),『羊飼いの暮らし イギリス湖水地方の四季』早川書房, p.378 (2017).
- 9) 稲葉信子,「世界遺産条約と文化的景観-文化と自然への統合的アプローチ」『環境-文化と政策』東信堂, pp.29-64 (2008).
- 10) Mitchell N, Rossler M, Tricaud P-M, (独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所文化遺産部景観研究室訳)『世界遺産の文化的景観保全・管理のためのハンドブック』独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所発行, pp.25-31 (2015).
- 11) 清水聡子,「人口減少に向き合う地域」『松本大学研究紀要』第11号, pp.101-115 (2013).
- 12) 新村出編,『広辞苑』第六版, 岩波書店, p.1703 (2008).
- 13) 野沢温泉村斑山文庫収集委員会,「日本文化の高揚に貢献した博士」『志をはたして高野辰之その学問と人間像』野沢温泉村おぼろ月夜の館, pp.23-36 (1994).
- 14) 鈴木恵一,「名曲が生まれた秘密」『志をはたして高野辰之その学問と人間像』野沢温泉村おぼろ月夜の館, pp.37-39 (1994).
- 15) 樋口忠彦,『日本の景観』ちくま学芸文庫 (1993).
- 16) 建設省道路局『道の駅懇談会の設置について』(1992.4.4).
- 17) 建設省道路局監修財団法人道路保全技術センター編集,『道の駅の本-個性豊かなにぎわいの場づくり』ぎょうせい, pp.3-17 (1993).
- 18) 国土交通省HP:「道の駅」概要と、全国「道の駅」連絡会HP:「道の駅」の取り組み <http://www.mlit.go.jp/road/Michi-no-Eki/outline.html>(閲覧日2017.5.1), <https://www.michi-no-eki.jp/about>(閲覧日2017.5.1).
- 19) 国土交通省HP:「「道の駅」による地方創生拠点の形成~モデル箇所の選定と総合的な支援~」を筆者がまとめる。 <https://www.mlit.go.jp/common/001052851.pdf>(閲覧日2016.12.12).
- 20) 関満博, 松永桂子,「暮らしと産業の要、「道の駅」の現在と未来」『震災復興と地域産業3 生産・生活・安全を支える「道の駅」』新評論, pp.1-6 (2013).
- 21) 公益社団法人日本マーケティング協会HP:「第7回 日本マーケティング大賞」 <http://www.jma2-jp.org/main/index>(閲覧日2017.5.1).
- 22) 「いのちの色をつなぐ糸 草木を敬い いちずに織る 志村ふくみさんの最新作 その着物生きている そばで生き方を学ぶ」『日本経済新聞』(2017.6.25).
- 23) カーソン R. L. (上遠恵子訳),『センス・オブ・ワンダー』新潮社, pp.1-60 (2017).